日刊工業新聞　2020年9月30日付
電気・電子部品・情報・通信面

HD体制 総合力発揮

生命科学で新規事業創出

エヌエフ回路設計ブロック会長　**高橋 常夫**氏

エヌエフ回路設計ブロックは10月1日付で持ち株会社体制へ移行する。同社は2018年3月期に連結売上高100億円を達成し、3期連続で2ケタ増収、営業・経常・当期増益を続ける。新たにエヌエフホールディングス（HD）会長として、エヌエフ回路設計ブロック（現エヌエフ回路設計ブロック準備会社）などの事業会社を率いる高橋常夫会長に、持ち株会社化の背景と狙いを聞いた。

□■

―持ち株会社の検討をいつ始めましたか。

「13年に直流電源の千代田エレクトロニクス（東京都豊島区）、17年に環境計測や自動車向け計測制御システムを手がける計測技研（栃木県高根沢町）を買収して子会社化した。当社を含むグループ3社で効率的に事業を推進するために、持ち株会社体制を考えるようになった。19年に設立した家庭用蓄電システム事業のNFブロッサムテクノロジーズ（横浜市港北区）が、順調に立ち上がったことも要因だ」

―HDの役割は。

「エヌエフHDはグループ全体のマネジメントに集中し、各事業会社の自律とともに、協調による総合力を追求する。この3年間、共同プロジェクトに取り組み、各事業会社がそれぞれ得意分野の開発を請け負ったり、協調体制を敷いたりして土台を固めた。エヌエフHDには『R&D室』を置き、グループとしての研究・開発機能も備える」

―新規事業創出が大きなテーマです。

「これまで主力にしてきた電子計測器と電源機器市場は、あまり伸びしろがない。家庭用蓄電システムで実績を積んだ環境エネルギー関連にとどまらず、ライフサイエンスや次世代IT関連でもイノベーションを創出したい。当社にはライフサイエンス分野でノイズの中から生体信号を検出する際に活用できる技術がある。量子コンピューターでカギとなる超電導素子の信号処理に使われる超低雑音増幅技術も持っている。蓄電システムでは産業用に展開したい」

―コロナ禍での新体制移行となりました。

「前年度（20年3月期）の業績をけん引した家庭用蓄電システムは、住宅用太陽光発電の固定価格買い取り制度（FIT）で期間満了を迎えた個人宅への訪問営業ができなかった。ただ、事業全体を通じ、新型コロナウイルス感染症の影響に底打ち感も見られる。エヌエフHDの舵をしっかり取っていく」（取材はウェブ会議で実施。写真はエヌエフ回路設計ブロック提供）

記者の目

全体を鳥瞰する経営実践

エヌエフ回路設計ブロックは計測技研を買収した翌年の18年6月、社長だった高橋氏がグループ最高経営責任者（CEO）兼務で会長に就任。この時点でグループ全体を鳥瞰する経営を重視し、布石を打っていた形だ。コロナ禍でHD化という理想像を成就する格好になったが、これまでの勢いを維持しつつ、計画通り事業戦略を進めていく。

（横浜総局長・青柳一弘）